

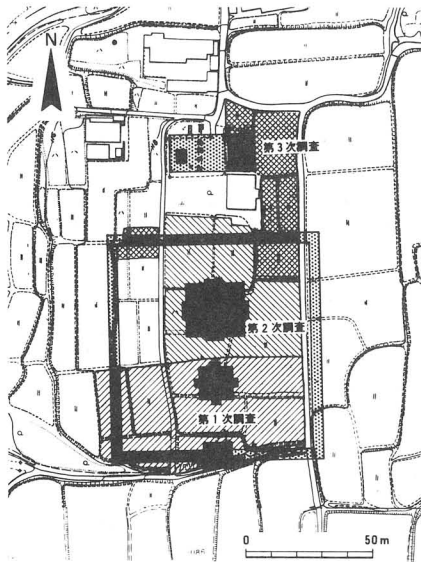
## 山田寺第3次（講堂・北面回廊）の調査

（昭和54年5月～昭和54年9月）

山田寺跡については、昭和51年度から発掘調査を継続して行ってきており、すでに第1次調査として塔・中門・西面回廊跡、第2次調査として金堂・北面回廊跡について実施してきた。両次の調査によって、塔・金堂の規模を確認し、伽藍配置についても従来考えられていたような四天王寺式伽藍配置ではなく、北面回廊が金堂と塔のみを囲む形式であることが判明した。今回の調査は講堂・北面回廊跡の検出を目的として実施した。所有地の関係で調査区を、講堂の東半部から北面回廊の東半部に至る地区（東調査区）、講堂北方地区、北面回廊の西半部地区（西調査区）の3ヶ所に設定するとともに、講堂西半部に現存する礎石等についての実測調査を行った（位置図参照）。

検出した遺構には講堂・北面回廊のほかに井戸3、土壇6、溝などがあるが、ここでは主として、講堂・北面回廊の遺構について概要を述べる。

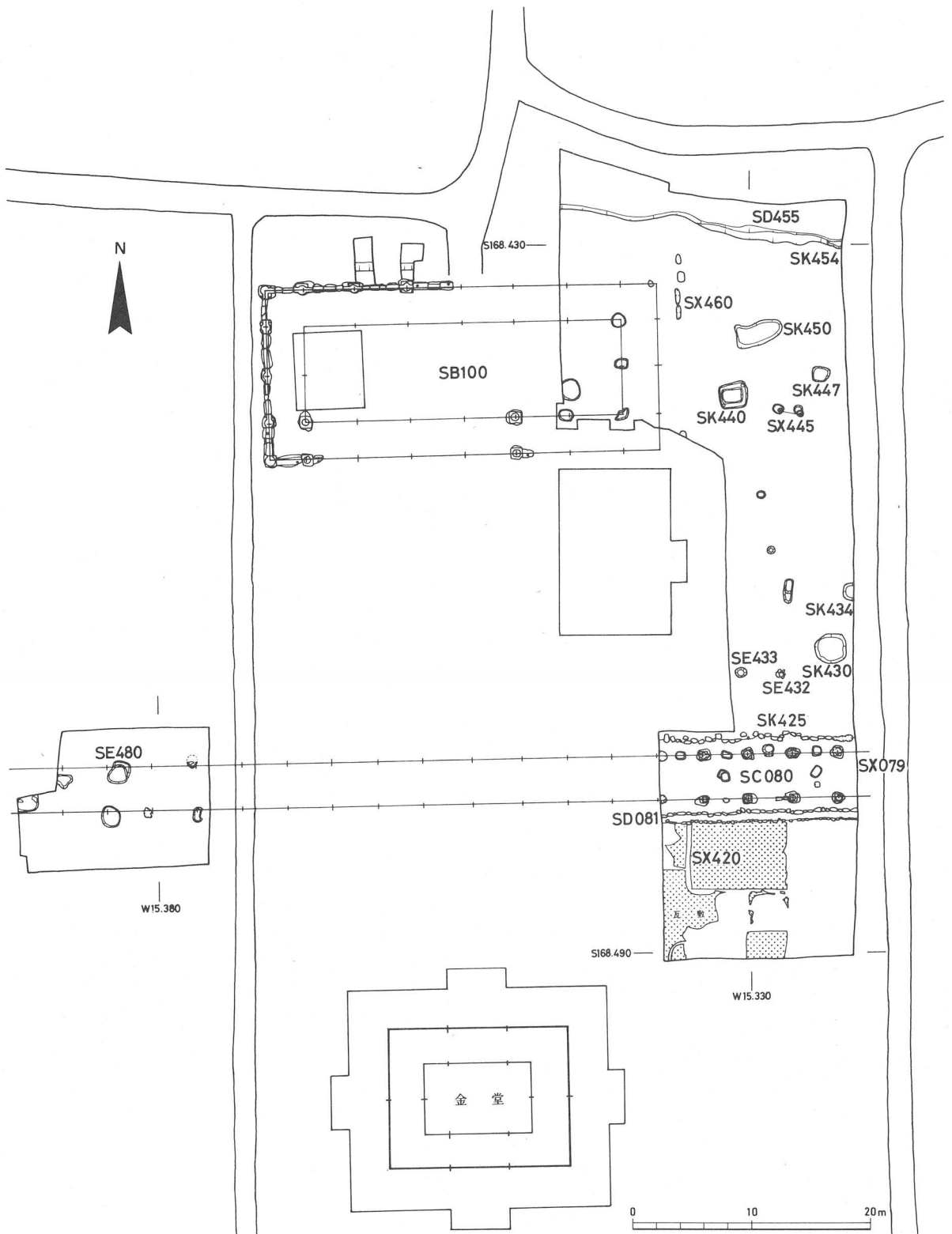
**講堂（SB100）** 講堂の基壇の大半は現境内の中にあり、礎石や地覆石が良好な状態で残っている。発掘調査を行った講堂の東半部は、現境内よりも一



調査地位置図（1：3000）

段低い水田である。この地区は明治時代の水田化に伴って著しく削平されており、礎石や基壇土は残っていない。遺構は全て耕土・床土下にある地山面で検出された。遺構検出面の深さは地表から20～30cmである。

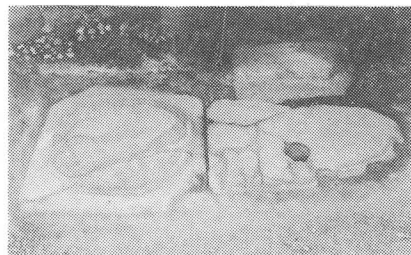
遺構検出の結果、礎石抜取跡5ヶ所と基壇の地覆石抜取跡2ヶ所を確認した。境内には創建時の位置を保つと推定される礎石が12ヶ所に残っており、それらと今回検出された礎石抜取跡から講堂の平面規模を復原すると、桁行6間・梁行2間の身舎に四面廂のつく建



山田寺第3次調査遺構配置図 (1 : 500)

物で、桁行8間（総長111尺）・梁行4間（総長48尺）の規模となる。また、講堂の中軸線は伽藍中軸線とほぼ一致し、伽藍中軸線上に柱位置があることになる。このことから各礎石抜取跡は、建物の東北隅、身舎の東妻柱列の3ヶ所、身舎の南側柱の東から2番目に相当することになる。柱間は規準尺を29.75mとすると、桁行では中6間が15尺等間、両端間が10.5尺、梁間は中2間が13.5尺、両端間が10.5尺である。

現存する礎石は花崗岩製で、一辺1mの方座の上に、下面径0.8～0.9m・上面径0.7～0.75m・高さ0.1mの円柱座が造出されている。ただ金堂や北面回廊の礎石のような蓮華座はみられない。また、北側柱列と西妻柱列の礎石には地覆座があるが、南側柱列と身舎部の礎石にはない。地覆石は礎石と同じく花崗岩からなり、上面には幅約38cm、高さ15cmの地覆座を造り出す。長さは0.5m～2.4mと一定でないが、これを礎石間に1～3個ならべている。そして南側柱列で3ヶ所、西妻柱列で1ヶ所、北側柱列で2ヶ所に扉の軸を受ける軸摺り穴が穿たれている。軸摺り穴は、いずれも直径15cm、深さ10cmである。南側柱列の西端間と西妻柱列の南端間では軸摺り穴が一方に寄って一ヶ所にのみあることから片開きの扉であったとみられる。北側柱列では西から4間目の地覆石に2ヶ所の軸摺り穴がある。以上の軸摺り穴の配置状況と講堂の中軸線を参考にする、講堂の南面はすべて扉で開放し、そのうち両端間は片開きの扉となる。東・西面は南端間だけ片開きの扉をつけ、他は壁となる。そして北面では中央2間を両開きの扉としていた。



講堂南側柱礎石

講堂調査区全景（東から）

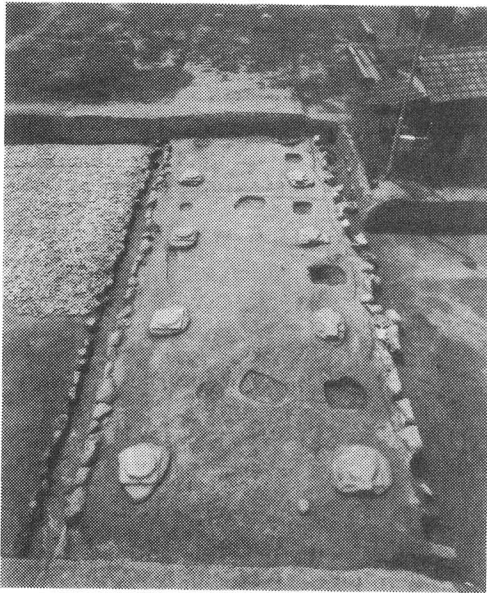
基壇の化粧石は全て抜取られており、地覆石抜取跡 S X 460 を検出した  
だけである。S X 460 は東妻柱列の東約 2 m にある南北方向の抜取跡で、幅 35 cm、  
深さ 6 cm ある。S X 460 の位置を基壇端とすると、基壇の出は東妻柱列から約  
7 尺となる。抜取跡の埋土には焼土・花崗岩片が含まれており、その周囲にも  
凝灰岩片が散乱しているから、基壇化粧は塔・金堂と同じく、地覆石に花崗岩、  
羽目石・葛石に凝灰岩を用いた壇上積基壇と推定される。基壇高は、旧地表面  
が削平されているので正確には求められないが、S X 460 の東部の地山面から  
礎石上面までの高さは約 75 cm ある。また、建物の桁行と梁行の総長が各々 111  
尺と 48 尺で、基壇の出が 7 尺とすれば基壇規模は東西 125 尺、南北 62 尺と推定  
される。なお、今回の調査区では階段部の遺構は検出されなかった。

基壇築成の状況は、講堂北方に設定した調査区において知ることができた。  
すなわち、基壇築成にあたっては、塔や金堂にみられた掘込み地業は行わず、  
地山を削平した後、その上に直接版築を行っている。版築層は粘質土と砂質土  
を交互につき固めたもので、一層の厚さは 5～15 cm ある。礎石の据付け穴は、  
基壇築成の途中で掘られ、根固め石を使用せずに礎石を設置した後、さらに版  
築を行って基壇を完成している。この手順は金堂や北面回廊と同じである。

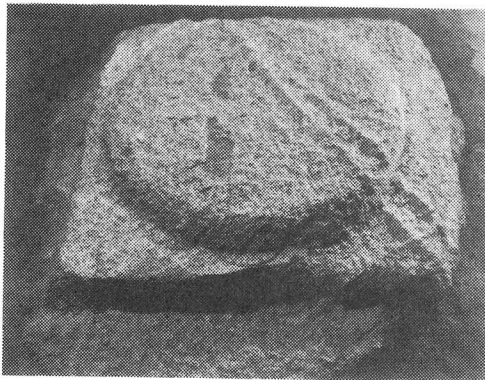
金堂・塔周辺は、奈良時代に瓦敷、平安時代にバラス敷で舗装されていたこ  
とが判明しているが、講堂周辺では、それらの痕跡はなかった。これは回廊に  
囲まれた塔・金堂の区画のみに舗装を行い、聖域視した結果であろうか。

**北面回廊 (S C 080)** 第 2 次調査では、北面回廊は金堂と講堂との間にあ  
り、伽藍中軸線上に柱位置のくることが判明している。その際検出された北面  
回廊は中軸線から東と西へ各々 4 間分の計 8 間分であった。今回の調査では北  
面回廊の東西の規模を明らかにするために東調査区と西調査区を設定した。

東調査区は第 2 次調査区に東接する水田で、一部第 2 次調査区と重複してい  
る。回廊部分の堆積層は、耕土層 (厚さ 25 cm)、床土層 (12～15 cm)、茶褐色  
粘質土層 (13～20 cm)、灰褐色砂質土層 (5～10 cm)、基壇土、地山となる。  
茶褐色粘質土層は、瓦堆積層ともよぶべきもので、多くの瓦とともに 12～13 世  
紀の瓦器が出土した。灰褐色砂質土層も 2 次堆積層である。回廊北方では灰褐



北面回廊SC 080 (東から)



北面回廊 南側柱列礎石

色砂質土層と地山との間に灰褐色粘質土層があり、11世紀の土器が出土した。地山は岩盤の風化した黄褐色砂質土で、回廊基壇の北方は一段低い。

調査の結果、回廊基壇の上面は削平されていたが、礎石、雨落溝が良好な状態で検出された。回廊は梁行1間の単廊で4間分あり、第2次調査結果とあわせると伽藍中軸線から東へ8間分が検出されたことになる。礎石にいずれも花崗岩製で風化が著しいが、観察の結果、回廊の礎石にも金堂の礎石と同様に蓮華座のあることが判明した。南側柱列の礎石は方座(下辺約70cm, 上辺約30cm, 高さ約6.3cm)の上に単弁十二弁の蓮華座(下面径約63cm, 上面径約45cm, 高さ約7.5cm)が造り出されている。北側柱列の礎石にもわずかに蓮華文の浮彫りが残っている。また、北側柱列礎石の蓮華座の両端には

上面幅約27cmの地覆座が造出されているから、回廊の北側は壁で仕切られ、南面のみ開放されていたようである。

北側柱列礎石間には地覆石や地覆石抜取跡はなかった。回廊の南側柱列の柱筋には、先述した茶褐色粘質土層中に据えられた榛原石の切石3個がある。榛原石は長さ50~60cm, 幅約27cm, 厚さ9.5~16cmあり、側面に地覆座を造出したと考えられる加工痕が認められる。礎石の両端にある地覆座の幅と榛原石の幅がほぼ一致することや、地覆石の掘形および抜取跡が検出されていないことから、地覆石は榛原石の切石であった可能性が強い。現存する礎石の上面は石

によって高低があり水平でなく、約10cmの高低差がある。そのため、基壇高として仮に西端の礎石上面までの高さを求めると、南の瓦敷上面から約35cm、北の地山面から約70cmとなる。

回廊基壇の化粧は、基壇縁石として長さ30～80cmの野面石を一行に並べた簡単なものである。基壇幅は、縁石の傾きによって6.3～6.55mとばらついているが、本来は6.3m（21尺）と考えられる。

基壇は地山を削り出して基底を造り、その上に版築をして築成されている。版築層は粘質土と砂質土を交互につき固めており、一層の厚さは4～9cmで6層、厚さ26cmほどを確認した。礎石の据え付け状況は金堂・講堂と同様であり、根固め石も使用されていない。また、基壇の化粧石を据えつけるにあたっては、版築層の上面から基壇縁を溝状に掘り、縁石を設置している。縁石の掘形の埋土からは少量の瓦片が出土した。

回廊の南側雨落溝（SC 081）は側石にのみ玉石を用いた溝で、内法幅約60cm、深さ約20cmある。北の側石は基壇の縁石を共用し、南の側石は基壇縁石より小型の石が用いられている。溝は下層に暗茶褐色粘質土、上層に灰褐色土が堆積し、上層からは多量の瓦が出土した。基壇北側の雨落溝は、側石の抜取跡も認められないことや旧地表面がもともと低かったと推定されることから、本来、雨落溝は設けられなかった可能性が強い。

北側柱列の礎石のほぼ中間に掘られた掘立柱列SX 079は、第2次調査で検出されたものの東延長部にあたる。調査区東壁にあるものを含めて4間分あり、柱間は3.45～3.8mとばらついている。掘形は一辺60～90cm、深さ45～58cmあり、版築層の上面から掘込まれている。礎石据付け時よりも後で掘られているが、掘形の埋土から出土する土器は7世紀後半のものである。回廊建設時の足場穴とも考えられず、その性格は不明である。

西調査区は後世の水田化によって著しく削平されており、東調査区よりも1～1.25m低くなっている。そのため、回廊に関係する遺構としては礎石落込み穴7ヶ所を検出したにとどまった。礎石落込み穴に礎石はなく、後世に礎石は抜き取られ、穴の底面には霉爛した花崗岩粉のみが付着していた。調査区の西

端にある礎石落込み穴は、伽藍中軸線から西へ10間目の礎石を落込んだものと推定される。伽藍中軸線から西へ10間目が、北面回廊の西隅の間にあたるのか、さらに1間西に延びるかについては調査区の関係で確認できなかった。

東調査区の回廊南方においては、奈良時代の瓦敷、平安時代のバラス敷が検出された。いずれも第1・2次調査で検出されているものと一連のものである。瓦敷はほぼ方形に区画するように敷かれており、方形のブロック間には、SX 420のように瓦の敷かれていない溝状の空間地がある。おそらく、水抜きのような機能を有していたものであろう。

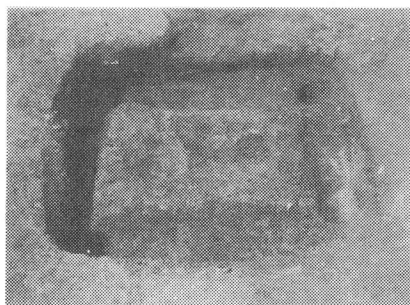
**その他の遺構** 講堂・北面回廊周辺に掘られた井戸、土壇、溝がある。これらの遺構は年代的に多岐にわたり、I期－7世紀後半、II期－平安時代、III期－鎌倉・室町時代およびそれ以降のものに大別できる。ここではI期の遺構とその他の時期の主要な遺構について述べる。

I期の遺構には土壇SK 430・454がある。SK 430は回廊の北方6mにある円形の土壇で、径2.7m、深さ0.25mである。少量の瓦、土師器、須恵器が出土した。SK 454は調査区の北東部にある不整形な土壇である。赤褐色粘質土が堆積し、土師器、須恵器が出土した。

II期の遺構にはSK 434、SX 445、SK 447がある。SK 434はI期の土壇SK 430の北にあり、灰褐色粘質土の上面から掘込まれている。南北1.5m、東西1.2m、深さ0.4mであり、投棄された状態を示す多量の瓦とともに瓦器碗、土師器皿が出土した。

III期の遺構には井戸SE 432・433・480、土壇SK 425・440・450、溝SD 455がある。SD 455は調査区の北端を東西に流れる大溝で、幅4m以上、深さ2.4mの規模をもつ。13～15世紀の遺物が出土した。SK 440は講堂の東にある方形の土壇で、一辺2.3m、深さ0.3mである。側壁下には幅0.2～0.3m、深さ0.1mの溝が巡っている。従って、土壇の底面は一段高くなる。土壇内の北東隅と南西隅には小柱穴がある。埋土からは焼土・瓦とともに梵鐘の鋳型、フイゴの羽口片が出土した。伴出土器からみて鎌倉時代後半の時期と思われる。この土壇は、形態的に通有の土壇と異なることから、梵鐘製作用のものと考え

られる。しかし深さが0.3 mしかなく、浅い点に問題が残る。SE 432・433は回廊北方にある井戸で、SE 432には瓦質の羽釜が井筒として使用されている。SK 425は回廊基壇上にあるSX 079の西から3番目の掘形を壊して掘られた土壇で、少量の土器が出土した。SE 480は西調査区にある円形の石組井



SK 440 (南から)

戸で、礎石落込み穴によって一部壊されている。井戸底には花崗岩板石が敷かれ、内径0.7 m、深さ2.2 mである。石組みには主に花崗岩玉石が使用され、一部に瓦、塼が転用されている。井戸内からは瓦器、土師器、瓦質の羽釜、備前焼の甕片のほかに竹片が出土した。

このほかに東西・南北方向の小溝や小柱穴があり、講堂基壇の上では明治時代以降の井戸や土壇が検出された。

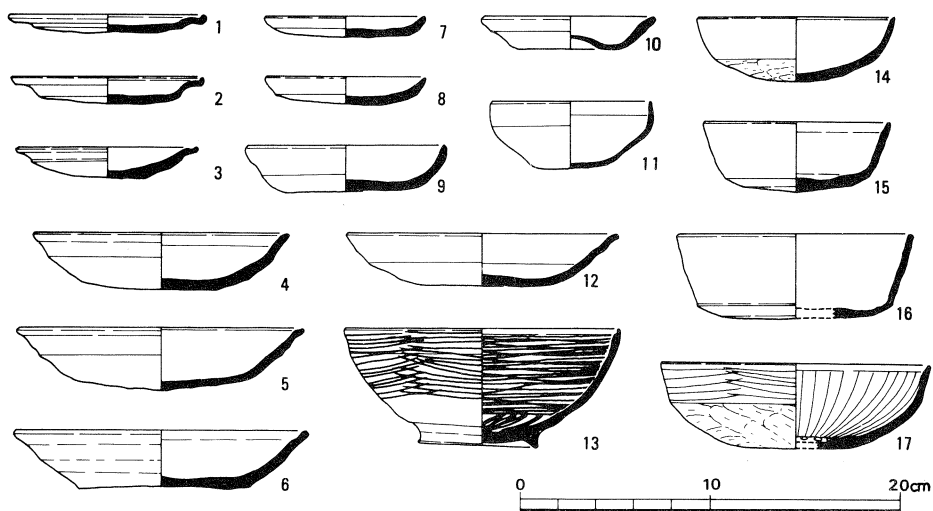
**出土遺物** 瓦塼類、塼仏、土器、金属製品、土製品があるが、さきの第1・2次調査に比べて遺物の出土量は少ない。

瓦塼類には、「山田寺式」の軒丸瓦・軒平瓦・極先瓦と多量の丸・平瓦がある。このほかに鷗尾、鬼瓦、熨斗瓦などの道具瓦や塼仏が少量ある。また、奈良時代の軒丸瓦6311Bや平安時代の変形唐草文軒平瓦、瓦当に「興福□」の文字を表した鎌倉時代の軒平瓦などがある。

「山田寺式」軒丸瓦は、これまでの調査で、A～Fの6種が確認されているが、今回の調査では、E種を除く5種161点が出土した。その出土比率は、D－A・C－B－Fの順で、D種が最も多い。このうちA・C種については、今回の調査地を北の講堂周辺地区と南の回廊・金堂周辺地区に分けてみると、北にC種、南にA種の多いことがわかる。これまでの調査成果によれば、金堂地区にはA種、塔地区にB種が多く、堂宇による使い分けがなされた可能性がある。講堂の軒丸瓦については、出土比率の高いC・D種がその候補となろうが、出土数が少ないため断定するまでには至らない。

極先瓦はすでに明らかにされている5種のうち、C種を除く4種115点が出





出土土器実測図

土した。しかし、調査区北半の講堂周辺からはほとんど出土しなかったことから、講堂には榿先瓦は使用されなかったと考えられる。軒平瓦は、四重弧文が大半で、わずかに三重弧文を含んでいる。

塼仏は、大・小の独尊像，四尊連座，十二尊連座の四種が明らかになっているが、今回は、四尊連座 2 点，十二尊連座 3 点の出土をみただけで、塔・金堂地区に比べて著しく少なく、講堂には塼仏は用いられなかったとみられる。

土器には土師器，須恵器，黒色土器，瓦器および陶磁器がある。山田寺創建期に位置づけられる 7 世紀代の土器は少なく，11 世紀以降のものが出土量の大半を占めている。

上図の 14～16 は SK 454，17 は SK 430 出土の土器で，いずれも 7 世紀後半に位置づけられる。1～6 の土師器の皿は北面回廊北方にある灰褐色粘質土から出土した。6 の底部は「回転糸切り」手法によって切離されている。11 世紀前半に位置づけられよう。このほかに，灰褐色粘質土からは二釉・緑釉・灰釉陶器片，黒色土器が出土した。12・13 は SK 434 から出土した土師器の皿と瓦器碗である。瓦器碗の外表面は 4 回に分けて磨かれている。11 世紀後半と考えられる。7～9 は SK 440 から出土した土師器の皿である。9 の口径は 10.4～11.4 cm あり，大皿のタイプとしては小型化している。これらの土師器は大官大寺で検出された井戸 SE 411 の埋土から出土したもの（概報 9）と類似しており，

13世紀末ないし14世紀初頭に位置づけられよう。10・11は井戸SE480から出土した土師器の皿と瓦器碗である。瓦器碗の口径は8.4cmあり、内外面の磨きや口径部の沈線はみられない。大和における瓦器碗の終末期のものに近く、14世紀後半から15世紀前半のものと考えられる。

金属製品には金銅製の飾金具や容器の蓋のつまみ、鉄釘がある。蓋のつまみは高さ2.7cm、最大径2.4cmの擬宝珠形のものである。井戸SE433の北方の包含層から11～12世紀の土器とともに出土した。このほかに土製品には円面硯、フイゴの羽口片、梵鐘の鋳型がある。鋳型はSK440から1個体分、約100片出土した。いずれも外型で、笠形や中帯の部分がある。鋳型はスサ入りの粘土を素地とし、その土に真土を塗り、さらに荒真土を塗って仕上げられている。外型の厚さは不明で、現存するものの最大厚は5cmある。梵鐘の規模等は判明しないが、製作時期は伴出土器から鎌倉時代後半期と推定される。

**まとめ** 今回の調査成果には、まず講堂の規模が正面8間であることを確認したことがあげられる。講堂の規模については『諸寺縁起集』に記された「五間四面」の記載から桁行7間と考えられており、その後も7間説あるいは8間説が説かれてきた。しかし、調査によって検出された礎石抜取跡などから山田寺講堂は、飛鳥寺・四天王寺・法隆寺と同じ桁行8間、梁行4間の建物であることが判明した。山田寺の建立の過程は『上宮聖徳法王帝説』裏書によって、比較的よく知ることができ、それによれば金堂は皇極朝、塔は天武朝に竣工した。金堂・塔の竣工時期については出土遺物からも裏付けられるが、講堂竣工時期を明らかにする遺物は出土せず、遺構も検出されていない。しかし『上宮聖徳法王帝説』裏書によれば、講堂本尊と考えられる丈六仏の開眼供養が天武14年（685）に行われていることから、講堂は遅くともその頃には完成していたと考えられる。

北面回廊については第2次調査分を含めて、伽藍中軸線から東へ8間、西へ10間の計18間分を検出したことになるが、隅間を確認するには至らなかった。第1次調査で検出された西面回廊の礎石落込み穴の抜取穴を参考にすると、北面回廊の東西の規模は、隅間を含めて20間ないし22間と考えられる。柱間につ

いては、第2次調査において、礎石抜取跡から梁行を12尺、桁行を13尺等間と考えたが、原位置に残る礎石からみると、梁行・桁行とも12.5尺とみる方が適切である。北側柱列と南側柱列に各々4個ある礎石から柱間を測ると、桁行は3.78m(12.5尺)等間、梁行も同じく12.5尺となる。さらに、東調査区東端の礎石を起点にして、桁行12.5尺で柱間を割付けていくと、伽藍中軸線を狭んだ東西の1間分は、柱間が14尺と広くなる。この広い2間については、門があったと推定されるが、その適否については、北面回廊の規模が判明した後、再検討したい。回廊礎石には金堂の礎石と同様に蓮華座を伴うことが判明した。わが国の古代寺院において、蓮華座を伴う礎石の例は知られておらず、きわめて特異なものと考えられる。また、礎石の蓮華座からみると、回廊の建立時期は金堂の建立時期とそれほどへだたらないものと推定される。

これまでの調査によって、金堂・塔は12世紀のうちに焼失したと推定されたが、講堂・回廊の焼失を示す遺構・遺物は今回は検出されなかった。講堂については、藤原道長が山田寺を訪れた治安3年(扶桑略記)や検校善妙が蘇我倉山田石川麻呂の忌日に法華八講を修した長元7年(多武峯略記)の記録がある。すなわち11世紀前半に講堂は焼失していなかったと推定される。『多武峯略記』には山田寺の伽藍の廃絶した状態が記されており、『玉葉』によれば、薬師三尊像を興福寺の僧が強奪したのが文治3年(1187)とある。いずれにしても、講堂の廃絶期も12世紀後半に求められよう。なお、第1次調査での東面回廊付近の調査によると、東面回廊は10世紀には崩壊したと推定されている。

堂塔の基準尺についてみると、金堂が33.3cm、塔が約30cm、講堂が29.75cm、回廊が30.2cmと各々異なっている。基準尺の相異は各建物の建立時期の差とも考えられるが、その解決については今後の問題として残される。また、伽藍中軸線上での堂塔の心々距離は、塔・金堂間が30.1m、金堂・北面回廊間が26.5m、北面回廊・講堂間が34.9mとなる。

山田寺跡の調査は、今回の調査でもって主要部を調査したことになるが、回廊の規模や基準尺など残された問題は多くあり、これらの解決にはまだ今後の継続的な調査が必要であろう。